

作家

東山 彰良 さんに聞く

聞き手 川島 葵さん ●フリーアナウンサー



ひがしやま・あきら
西南学院大学経済学部卒、
西南学院大学大学院経済
学研究科修士課程修了。
2002年に『タード・
オン・ザ・ラン』後に『逃
亡作法』に改題』で『こ
のミステリーがすごい！』大賞の銀賞および
読者賞を受賞。2015
年には『流』で直木賞、
2016年には『罪の終
わり』で中央公論文芸賞
を受賞。

小学生の頃から一人で二番館へ
行ったり、テレビで洋画を見たり。

川島 本日は、2015年に『流』で直木
賞を受賞なさった作家の東山彰良さんにお
話を伺います。東山さんは、福岡で少年時
代をお過ごしになったそうですね。

東山 ええ、台湾で生まれましたが、小
さい頃は親に連れられて台湾と日本を行っ
たり来たりしていた時期があり、広島に住
んでいたこともあります。小学校3年生の時
から福岡です。

川島 どんな少年時代でしたか。

東山 野球が好きで、放課後は近所で野球
をやったり、友達と平和台球場へ試合を見
に行ったりという毎日でした。

勉強は、あまり得意ではなかったですね。
親から勉強するように言われた記憶もな
いです。本も、それほど読んでいなかった
ように思います。

川島 そうなると、後々、どうやって物語

を生み出すようになったのだろうと、ちょっと気になります。

東山 映画が好きでしたね。当時の福岡には二番館があつて、リバイバル映画を300円くらいで見ることができたと思います。小学校高学年の頃から、一人でよく見に行っていました。

また、当時は洋画がブームだったのかもしれません。テレビでも、月曜ロードショー、水曜ロードショー、たしか金曜か土曜にゴールデン洋画劇場、そして日曜洋画劇場がありましたから。そのほかにも、深夜映画がたくさん放映されていました。**川島** 映画のどこに魅力を感じていらっしゃったのでしょうか。

東山 私は台湾で生まれましたが、周りの大人から怖い話や不思議な話を聞かせてもらうことが好きでした。近所には映画館がたくさんあり、大人が連れて行ってくれるのも映画館が多かったような思い出があります。映画が身近にあったんですね。

私が住んでいた所は自分の家と他人の家

の垣根が本当に低くて、互いに自由に行き来していました。私が小さい頃からずっと親戚のおばさんだと思っていた女性が、実は単なる隣人だということが大人になってはじめて分かったこともあります。

川島 家族同然のご近所付き合いだったわけですね。

東山 ええ、みんな、私の祖父父母の代からの付き合いなので。かつて中国で戦い、敗れて台湾に逃れた時から苦楽を共にしてきた人たちがたくさん住んでおり、私もその



街で育ちました。

映画から音楽、美術へ、 そして東南アジアへの旅に出た

川島 西南学院高等学校から西南学院大学経済学部へ進学なさいました。経済学部をお選びになった理由は何でしょうか。

東山 大学進学を考えたときに、特に明確な目標はなく、あえていえば文学や哲学に興味がありました。父に相談したところ、経済のほうがいいだろうと言われたこともあり、経済学部を選びました。合格したときは、「これで、あと4年間、モラトリウムがつづく」と思ったことを覚えています。

勉強のほうは、先輩や同級生に助けってもらったりして、何とかなりました。高校時代はバンド活動に熱中しましたが、大学では美術部に入りました。

川島 映画、音楽、美術と変わってきたんですね。

東山 よく分からずに美術部に入っ



東山彰良さん

まったので、すぐに辞めようと思っていましたが、1年くらいたって、絵を描くことが少しずつ楽しくなってきました。結局、美術部には4年間いました。

また、海外旅行も好きになりました。ふだんはアルバイトでお金を貯めて、夏や春の長い休みに1〜2カ月、東南アジアを旅していました。アルバイトで貯めたお金が15〜20万円くらい、往復の格安航空券が8〜9万円だったので、残りの10万円で1カ月〜40日間ほど、タイやマレーシア、シンガポールなどを旅するのですが、本当にお金がありませんでした。

川島 旅行の目的は何だったのでしょうか。

東山 自分探しのなことですかね。わけも分からずに、誰よりも遠くへ行きたいとか、そんなことを思っていたような気がします。

旅で経験した人との出会いや出来事がいまの私の原風景になっている

川島 自分探しの旅で、何か見つけられましたか。

東山 旅が私の原風景になったような気がします。大学を卒業して就職したあとも旅に出なくて、このままサラリーマンを続けていると学生時代のような長い旅はもうできないということが一番のストレスでした。
川島 旅の間は、どのようにお過ごしになっていらっしゃいましたか。

東山 いろいろな人と知り合って、いろいろな出来事がありました。全財産を盗まれたり、火事にあたり、オートバイを運転していてトラックに当て逃げされたこともありました。

川島 それは大変な経験ですね。

東山 ええ、しかし、そのたびに誰かが助けてくれたのです。マレーシアで荷物を全部盗まれた時は、泊まっていたホテルの経営者に事情を話したら部屋をそのまま使わせてくれた上に、まかない飯を食べさせていただき、夜は遊びにまで連れて行ってもらったりしました。

川島 親切な方に出会って、幸運でしたね。

東山 翌年、そのホテルにお礼に伺ったところ、たまたま私が去った日にホテルが火事で焼け落ちたと聞いて、本当に驚きました。その晩は、ホテルの従業員だったおじさんが自宅に連れて行ってくれましたが、私と同年代の男女数人が下宿しており、みんな仲良くなつて、そのまま2週間くらい留まっしまいました。人数が多いため寝る場所がなかったのですが、おじさんの家は最上階だったので、屋上にマットを敷いて寝ました。

川島 どんな環境でも過ごせる。自由自在

に生きていたという感じですね。

東山 当時は、確かにそのように思っていました。旅の途中でいろいろな人と知り合いましたが、1年から3年といった長期間、旅を続けている人がたくさんいました。いまでも憧れますね。

川島 もしいま、時間ができたら、どこに行きたいとお思いですか。

東山 何らかのテーマがある旅をしたい。例えば、私は酒が好きなので、いろいろなところの酒を飲み歩く旅とか。

私はよく「テキーラ・マエストロ」と言っているのですが、テキーラが好きだと普段からあちこちで話していたら、とうとう蒸留所に招待されることになりました。

川島 テキーラの蒸留所は、いったいどこにあるのでしょうか。

東山 テキーラはメキシコの酒で、蒸留所の90%以上がハリスコ州に集中しています。

川島 普段から言い続けていたら、周囲の人も覚えていて、ご興味がおありならご案

内します、となったわけですね。お酒を通じた旅があったり、旅をきっかけにまた別の世界が開けたりするのでしょうね。

「自分はいままで、何かを積極的に求めたことはなかった」という思い

川島 小説を書くようになられた経緯を教えてください。

東山 旅をしているときに、旅行に必要なものは何かと考えて、お金やパスポートといった実際的なものは別にすると、「英語と筋肉」ではないかと思いました。

旅先で厄介事に巻き込まれないためには体を鍛えておいたほうがいいと思い、ウエイトトレーニングに励みました。また、英語の勉強をある程度したところで原書を読みたいと思ったときに、知り合いにエルモア・レナードの小説を薦められました。その犯罪小説が非常に面白くて、たちまち夢中になりました。

川島 では、最初は英語の原書からお入り

になったわけですね。

東山 そうなんです、そのあとは日本語版を読みました。当時は、単に好きで読んでいただけです。

私が大学を卒業して就職した当時はパブル景気で、就職自体は難しくなかったのですが、すぐに辞めて大学院に入りました。一度社会人を経験したため、学生という身分のありがたみがよく分かったので、大学院時代はよく学びよく遊びました。結婚して、子どもも生まれました。

大学の教員になることを目指していましたが、博士論文を何度書いても却下されま



川島 葵さん

した。そろそろタイムリミットが見えてきて、こんど論文が通らなければ諦めるしかないというときになって、半ば現実逃避のような気持ちで小説を書き始めたのです。

川島 追い詰められているときに、ちよつと休憩するためだったのでしょうか。

東山 それもありますが、台湾にいる幼なじみが、向こうではちよつと有名なミュージシャンと結婚することになって、私もそのミュージシャンや彼の仲間と知り合いになりました。

ちよつど2000年頃で、台湾にはまだ米国のロックしかなかった時代に、彼らは中国語や台湾語でロックをやりたいといつて、誰にも相手にされないとこからはい上がってきたところでした。現在では、台湾では誰もが知るロックバンドになっていますが、そんな彼らと何度も会っている、「自分はいままで、何かを積極的に求めたことはなかった」という思いがフツフツと湧いてきました。それが7月のことです。



ここで逃げたらもう後はない、石にかじりついてでも

東山 博士論文を何度も書いては却下されていましたが、長文を書き続ける持久力だけはついたと思います。そうして12月のある夜、何の準備もなくパソコンの電源を入れました。知っている作家といえばエルモア・レナードくらいで、私は映画も好きだったので、エルモア・レナードになりきってハリウッド映画を文章で書くという現実逃避の作業を始めたのです。

そのまま朝まで書き続けたところでパソコンがフリーズし、全部消えてしまいました。

川島 えつ、本当ですか。そのあと、どうなさいましたか。

東山 落胆している私に、上の方から「そんなことをしている場合ではない。ちゃんと論文を書きなさい」という天の声が……。

川島 聞こえてきたのですか。

東山 ということにはならず(笑)、少し休んで、最初から書き直しました。2回目なので推敲しながら書くことができたため、1回目よりも良くなっているという実感がありました。

その後3カ月間書き続けて最初の小説が完成し、新人賞に応募しました。一度は落ちたのですが、加筆修正したもので別の賞に応募し、デビューさせていただきました。

川島 周りの方は驚いたでしょう。

東山 できたものを友人に読んでもらったところ、みんなから面白いと言われたので、私もその気になってしまったのです。

私はかつてサラリーマンから逃げ出し、学問の道にも入れず、ようやく作家に通じ

る扉がかすかに開きかけたように感じたので、ここで逃げたらもう後はない、石にかじりついてでもと思いました。

とはいえ、小説を書くこと自体は楽しかったし、いまでも楽しんで書いています。

川島 本当に、トントン拍子に作家デビューなさったわけですね。

東山 そうかもしれません。書いたものがポツになったという経験はありません。

私がデビューした当時は、作家としての力量がまだ身に付いていなくても、本のカバーに「新人賞受賞」とあればある程度は売れるという、振り返ってみるといい時代でした。ですから、私はデビュー後も長い間、自分を作家と呼ぶことに抵抗がありませんでした。大学の非常勤講師も務めていたので、職業を尋ねられると大学非常勤講師と言っていたくらいです。

川島 しかし、周りからは、賞を取って本も売っていたわけですから、まぎれもなく作家だとみられていらつしやうたでしょう。

東山 いえ、私が作家だということは誰も知りません。売れている作家はほんの一部で、私のような「それ以外の作家」は、ほとんど誰も気が付かないものです。

落選したら夢は終わる

しかし、幸いにも夢は覚めなかった

川島 一つの作品を書き終えると、すぐに次の作品に取り掛かれるのでしょうか。

東山 そうですね。作家に憧れてなったというよりも、家庭があつて、何とかして収入を得なければいけないという切迫した思いが先にあつたので、次の本を書くしかないという感じでした。

そんなわけですから、誰かに「東山が書いているのはエルモア・レナードのまねだ」と言われて、いつ化けの皮を剥がされるのかと心配でした。行けるところまでは行くかと思つて、今日まで続けてきました。

川島 その後も受賞作品を生み出して、2015年には直木賞を受賞なさいました。

東山 自分に関係のある賞だとはいえ、全く思つていませんでしたから、本当に驚きました。

候補になつてから最終選考まで、1カ月間ありました。私の念頭にあつたのは、その1カ月の間に、「直木賞候補」ということで1冊でも多く本が売れてほしいということでした。

川島 なるほど。この1カ月間が勝負だと。

東山 そうです。落選したら、そこで夢は終わるところが、幸いにも夢は覚めませんでした。

川島 選考結果を知らせる電話がかかってきたわけですね。

東山 電話の呼び出し音が鳴って夢から覚める、つまり目覚し時計のベルが鳴つたと思いました。

川島 受賞おめでとうございますと言われて、どうお感じになりましたか。

東山 最初に頭に浮かんだのは、これで本が売れたら子どもたちを大学に行かせてやれるという思いでした。その目途がついた

ことが、うれしかったですね。

『流』は父親がモデル、

祖父の物語はまだ書いていない

川島 たくさんの作品を書いていらっしやいます。直木賞を受賞なさるまで、小説を書くことに関してご家族の反対はございませんでしたか。

東山 妻が反対するようなことはなかった。なので、ありがたかったですね。

川島 『流』も他の作品もそうですが、台湾で過ごされたときのお話に重なる部分が多いように感じました。やはり、小さい頃のご経験や土地のご記憶から作品づくりに影響を受けていらっしやるのでしょうか。

東山 『流』の場合は、もともとは祖父の物語を書きたいと思っていたのですが、自分の筆力に自信が持てませんでした。家族の思い出というモチーフは、一回書いてしまうと二度と使えないので、失敗がこわくて手を付けられなかったのです。

それが、『流』の約2年前に『ブラックライダー』という作品を書いて、やや自信が付いたので、そろそろ家族の歴史や記憶をテーマに書いてみようと思いました。祖父の物語は、実はまだ書いておらず、『流』は父親がモデルです。父親の話自分をどれだけ書けるか、みてみたいという気持ちも少しありました。ですから、力みのない作品に仕上がったと思います。

小説を書いたら最初に妻に見せるのですが、『流』を読んだ妻は「普通」と言っただけでした。

川島 自然体で書くことがおできになったのですね。

東山 そうかもしれないですね。物語の中のほとんどのエピソードが何らかの事実を脚色したものであり、その事実の部分と妻が共有している。彼女にしてみれば、あまり珍しくなかったのだと思います。

川島 東山さんの他の作品には、友人とか音楽、映画や歴史的なことといった共通点

が少しずつあって、それが東山さんが愛を注いでいらっしやる対象なのかなと思いがら楽しく拝読しました。

東山 映画や音楽は、確かにおっしゃるとおりですね。いま書いている作品も、タイトルは未定で5月に出版される予定ですが、そうなるでしょう。

登場人物が勝手に動き出す、

その瞬間に小説を書く醍醐味がある

川島 映画をたくさんご覧になった経験は、小説をお書きになる上で役立っていますか。

東山 役立っている面と呪縛になっている面の両方があります。役立っているのは、物語の見せ方や展開を考える際に、具体的なシーンを思い浮かべると書きやすいということですね。

逆に、小説は出版後に映画やテレビドラマなどになると本の販売が伸びるものですが、初めからそれを念頭に置いて書こうとすると、物語自体が伸びようとしている方

向へ伸ばしてあげられなくなる。そうした呪縛から、しばらくの間は逃れることができませんでした。例えば、ストーリーの展開がこちらの方向へ広がろうとしているのに、それでは2時間の映画に収まらないので、話が収束する方向へ持っていくってしまおうとか。

数年前にそうしたことを全部取り払って、物語の分岐点にさしかかったとき、物語が行きたがっている方向へ進めていったら、非常に長い小説になってしまったことがあります。それで自信が付いたという面があります。映像化を念頭に置いて小説を書くとき、作品にとって良い面ばかりではないと思います。

川島 小説が自らの方向性を持って動いていくということがあるのですね。

東山 よく「登場人物が勝手に動き出す」といわれますが、書いている本人にはストーリーの筋道がちゃんと見えていたはずなのに、ある地点まで書き進んだら違う道がふ

と見えて、そちらのほうが正しいと直感的に分かる。その瞬間が小説を書く醍醐味であり、書いていて救われるという感覚を味わうことができます。

川島 どういうルートになるか、何が待ち受けているか分からないけれど、そこに飛び込んでいくということでは、先ほどの旅行のお話と重なるところがありますね。

東山さんは母校の西南学院大学や筑紫女学園大学などで教えていらっしゃるようですが、学生と小説の話をなさるような機会はおありでしょうか。



東山彰良さん（右）と川島葵さん
（2017年2月9日 西鉄グランドホテルにて）

東山 ありませんね。私はペンネームで小説を書き、大学では本名で教えているので、私が小説を書いていることを学生は知りませんから。

川島 学生に伝えたいことはございますか。

東山 学生時代は無駄なことをすることにとても価値があるように思います。私の場合は旅をすることと音楽と映画。それらは、将来、何かに結び付けるためではなく、単に夢中になったからやっただけ。大学には、それができる時間があるので、たくさん無駄なことをすればいいと思います。

おそらく、無駄な部分がある人々を最もよく説明していると思います。私は仕事をしながら、あなたは違う仕事をしている。それではなかなか分かり合えませんが、私は東南アジアの旅行が好きで、あなたは旅行には行かないけれど映画が好き、といった無駄な部分から、相手のことが理解できるようになると思います。

川島 ありがとうございます。